

1 次の文章を読んで、あとの問1から問5までの問いに答えなさい。

1 人はなぜ掃除をするのだろうか。生きて活動するということは、環

境に負荷をかけることだと、人はたぶん本能的に自覚している。だとしたら、負荷を生まないように、自分たちが生きるために恵まれたこの自然を汚さないように活動すればよさそうなものだが、人の想像力

あるいは知力は、負荷をかけ続けた果ての地球を想像したり、数世代先の子孫の安寧に配慮したりすることには至らなかった。今日、僕らは眼前に現れた危機、「A」浜に打ち寄せ海洋に堆積する大量のプ

ラスチックゴミ、気候変動によるゲリラ豪雨や巨大台風、極点の氷や氷河の解水による潮位の変化など、近づくつつある危機の予兆をまのあたりにして、地球という資源の限界に気づき、「持続可能性」などと

いう殺伐とした言葉を口にするようになった。文明は急ブレーキを踏み、大慌てでハンドルを切ろうとしている。確かに必要な反省であり対処であるから、これに異を唱えるつもりはない。しかし、いきなり「地

球」という大テーマを口にする前に、^① 人が本来持つているはずの自然や環境への感受性を反芻してはどうだろうか。

2 さしあたっては「掃除」である。人は掃除をする生き物だ。掃除は

誰に教わることなく、あらゆる文化・文明においてそれぞれの方法で行われてきた。ある仕事で、世界中の掃除の情景を映像として集めたことがある。オペラハウスの客席の掃除、バイオリン奏者の楽器清掃、

教会の窓拭き、公園の落ち葉除去、モスク周辺の街路掃き、イランの絨毯掃除、万里の長城の掃き掃除、奈良の東大寺で毎年行われる大仏のお身拭い……。集めた映像を数秒ずつ数珠つなぎに編集して眺めると、不思議と胸が熱くなる。人類は掃除をする生き物なのであるが、なぜ人は掃除をするのか。ここに何か未来へのヒントがあるように思えてならない。

3 少し観察してみると、掃除とは、人為と自然のバランスを整える営

みであることがわかる。未墾の大地を、自分たちに都合よく整え、都市や環境を構築する動物は人間だけだ。だから自然に対して人がなした環境を「人工」という。人工は心地がいいはずだが、プラスチックやコンクリートのように自然を侵食する素材が蔓延してくると、人は自然を恋しがるようになる。「人工」は巨大なゴミなのではないかと気づき始めるのである。一方、自然はといえば、放っておくとほこりや落ち葉が降り積もり、草木は奔放に生い茂る。自然は人を保護するためにあるわけではない。放っておくと荒ぶる姿となって、人の営みを蹂躪する。人が住まなくなった民家の床や畳の隙間からは、またたく間に草が芽を出し、生い茂り、数年のうちに草木に飲み込まれてしまう。緑を大切に、などという言葉もはや出ないほど、緑は猛威をふるうのだ。だから人間は、自然をほどほどに受け入れつつ、適度に排除しながら暮らしてきた。おそらくこれが掃除であり、そのバランスこそ掃除の本質であろう。

4 こんな風に掃除のことを考えているうちに、「庭」に思いが至った。

庭、特に日本の庭は、「掃除」すなわち自然と人為の止揚、つまりその拮抗とバランスを表現し続けているものではないかと思っただのである。掃除はもちろん日本だけのものではないが、お茶を飲んだり、花を立てたりという行為を茶の湯だの生け花だのに仕立てるのが得意な日本人である。住居まわりの環境を整える「掃除」という営みを「庭」という技芸に仕上げたのかもしれない。落ち葉は掃きすぎず、草木も刈りすぎず程よく茂るに任せる。まるで、打ち寄せる波が砂浜をあらう渚なぎさのように、人為と自然がせめぎ合う「ほどほどの心地よさ」を探し

当てること、それが庭の本質である。庭は美的な作為であり創作物と思われているかもしれないが、自然に対するあらゆる人為は、いわば「しでかし」に過ぎない。しかし、そのしでかされた庭に愛着を覚え、これを慈しむ人々が現れて、程よく落ち葉を掃き、苔を整え、樹々の枝葉を剪定し、守り続けた結果として「庭」は完成していくのだ。当然、長い時間が必要だが、歲月のみが庭を作るわけではない。やはり「人為と自然の波打ち際」が管理され続けることが必須である。

5 大上段に振りかぶって「地球温暖化対策」とか「持続可能な社会」を考えるのも重要なことだと思うが、歴史の中、文化の中に蓄積され、すでに人に内在しているはずの知恵や感受性に気づいてみることも同じくらい重要なのではないか。海外の旅を終えて日本の国際空港に降り立つときに、いつも感じることは、とてもよく掃除されていること

である。空港の建築は、どこも質素で味気ないが、掃除は行き届いている。床にシミひとつないというような真新しさではなく、仮にシミができて、丹念に回復を試みた痕跡を感じる。そういう配慮が隅々に行き届いている空気感がある。おそらく、日本のラグジュアリーの要点には掃除がある。ただ単に、磨きあげるのではなく、自然や草木といったものに心を添わせつつ、生きている者としての張りを感じていること。石や木、しつこいや畳といった素材に気持ちを通わせつつ、その自然な様相を味わい楽しむ感覚が掃除であり、そういう営みの中に日本のラグジュアリーは宿るのかもしれない。

（原研哉『低空飛行——この国のかたちへ』による）

（注） ○ 1 5 は段落符号である。

- 安寧Ⅱ穏やかで平和であること。
- 殺伐Ⅱすさんでいるさま。
- 反芻Ⅱここでは、一つのことを繰り返す思い、考えること。
- モスクⅡイスラム教の礼拝堂。
- 数珠つなぎⅡ多くのものをひとつなぎにすること。
- 蔓延Ⅱ広がること。
- 蹂躪Ⅱ踏みにじること。
- 止揚Ⅱ対立する二つのものを高い段階で統一すること。
- 拮抗Ⅱほぼ同じ力で互いに張り合うこと。

○ 剪定^{せんてい}＝枝の一部を切り取って整えること。

○ ラグジュアリー＝ここでは、空間から感じられる心地よさのこと。

○ しつくい＝日本建築の壁や天井などに使用される塗料の一つ。

問1 「A」にあてはまることばとして最も適当なものを、次のA

からEまでのの中から選びなさい。

A しかし I それとも U つまり E なぜなら

問2 ① 人が本来持っているはずの自然や環境への感受性 とあるが、そ

の説明として最も適当なものを、次のAからEまでのの中から選びなさい。

A 自然や環境が絶えず変化していくという事実に気づく力

I 人の活動が自然や環境に負荷をかけていることを感じ取る力

U 自然や環境が変化していく姿を数世代先まで予測する力

E 人の活動が自然や環境に与えている負荷をすぐに取り除く力

問3 次の文章は、ある生徒が第三段落と第四段落の内容をまとめたもの

である。この文章に対する評価として適当でないものを、あとの

AからEまでのの中から一つ選びなさい。

人間は、自然をほどほどに受け入れつつ、適度に排除しながら暮らしており、そのバランスを整える営みが掃除である。また、日本の庭は、人為と自然がせめぎ合う「ほどほどの心地よさ」を探し当てることを本質としている。だから、日本の庭は、人為と自然のバランスを整える掃除という営みを、技芸に仕上げたものであると言いうこともできる。

A 本文にある具体例や比喻を省略して端的に記している。

I 掃除の本質を述べた部分を本文から適切に抜き出している。

U 接続語を使用することで論理の構造を明確にしている。

E 掃除と日本の庭に共通している点を的確に述べている。

オ 日本の庭が技芸に仕上げられた理由を簡潔にまとめている。

問4 次のアからエまでの中から、その内容がこの文章に書かれている

ことと一致するものを一つ選びなさい。

ア 環境に現れた危機の予兆に接した私たちは、地球という資源の限界に気づき、持続可能な社会について考えるようになった。

イ 掃除という営みと切り離せない日本の庭は、日本的な他者への思いやりを表現しており、海外でも高く評価されている。

ウ 環境問題を解決するためには、文化や文明の力を最大限に引き出し、人為と自然のバランスを回復させる必要がある。

エ 日本の空港で居心地の良さを感じるのには、床が隅々まで磨きあげられ、シミひとつない新しさが保たれているからである。

問5 あとのアからオまでは、本文と次の参考文献を踏まえて筆者の考え

をまとめたものである。その内容が本文と参考文献に書かれた筆者の考えに近いものを一つ選びなさい。

(参考文献)

しまとがわ
四万十川は、高知県西部を流れる清流である。もちろん川もきれいだが、そこにある人々の暮らしと一体になった風景に、しみじみと考えさせられるものがある。特に注目したのは「沈下橋」と呼ばれる橋である。

日本は台風の国であるが、高知はその玄関口のような場所で、自然の猛威から逃れるすべはなく、それを受け止めるべく暮らしの環境を整えてきた。四万十川は増水すると激しい濁流に変貌するのであるが、興味深いことに沈下橋は増水するとあつまり水面下に沈んでしまう。橋には水流の抵抗となる欄干がなく、橋の断面は飛行機の翼のような形をしているので、水に潜ってしまうことによつて破壊から逃れる、という構造になっている。

この沈下橋が、上流から下流まで、つまり短い橋からとても長い橋まで六十あまりある。その土地の人たちの暮らしの必要から必然的に生まれてきた橋であるからいわば環境デザインである。

最近では、しつかりとした橋脚を持ち、ずっと高いところに架橋され、増水にもびくともしない「拔水橋」がいくつかできたが、残念

ながら便利さと引き換えに、四十万川と沈下橋がおりなす風景を壊しているというほかない。確かに、増水のたびに水に沈んで通れなくなる橋は不便かもしれないが、自然の脅威を肌で感じつつも、川と近い距離で水に親しみつつ生きる暮らしに、四十万川流域の人々が心地よさや誇りを持っているのだとしたら、この景観を守っていくことの方が豊かと言えるだろう。

はらげんや
(原研哉『低空飛行——この国のかたちへ』による)

(注) ○ 欄干＝人が落ちないように橋の両縁に設けられた柵状のもの。手すり。

ア 本文も参考文も、自然の猛威から人々の生活をいかにして守るかということが共通のテーマになっている。

イ 本文も参考文も、人工的なものはできるだけ排除して自然を後世に残そうという考えが柱になっている。

ウ 「庭」も「沈下橋」も、自然のもつ荒々しさを受け入れて環境を整えながら生きる暮らしを象徴している。

エ 「沈下橋」は「庭」とは異なり、自然の猛威から逃れようとすることのむなしさが表現されている。

オ 「庭」と同様に「沈下橋」は、自然との共生を図りつつデザイン性を高めることを意図して作られている。

2 次の問1から問3までの問いに答えなさい。

問1 次の文中の傍線部①、②に用いる漢字として正しいものを、それ

ぞれあとのアからエまでのの中から一つ選びなさい。

① ヒヨク ② 大な大地が広がる。

① ア 肥 イ 被 ウ 非 エ 比

② ア 浴 イ 翼 ウ 翌 エ 沃

問2 次の文中の傍線部と同じ意味で用いられている漢字として正しい

ものを、あとのアからエまでのの中から一つ選びなさい。

厳かな雰囲気の中で卒業式が行われた。

ア 厳選 イ 厳肅 ウ 厳禁 エ 厳守

問3 次の文中の「A」にあてはまる最も適切なことばを、あとの

アからエまでのの中から選びなさい。

科学技術は「A」の発展を続けている。

ア 東奔西走 イ 不易流行 ウ 一触即発 エ 日進月歩

4

次の漢文（書き下し文）を読んで、あとの問1から問4までの問いに答えなさい。（本文の……の左側は現代語訳です。）

後漢の魯恭字は仲康、扶風平陵の人なり。肅宗の時、中牟の令

扶風平陵の出身である。中牟の長官

に拜せらる。専ら徳化を以て理むることを為し、刑罰に任ぜず。郡国に

地方に

螟ありて稼を傷ふ。犬牙の縁界も中牟に入らず。河南の尹袁安之を聞

害虫が発生して田畑の。県境が複雑に入り組んだ場所でも。河南郡の。害虫は中牟県内に入らなかった。長官であった

き、其の実ならざるを疑ひ、仁恕の掾肥親をして往いて之を廉さしむ。

仁恕という役職にあった肥親に中牟を視察させた。

恭阡陌を随行し、俱に桑下に座す。雉有り過ぎて其の傍らに止まる。

あせ道。キジが目の前を。通り過ぎて

傍らに童児有り。親曰はく、「児何ぞ之を捕らざる。」と。児言ふ、

坊やはどうしてキジを捕まえ
ないのかね

「雉方に雛を将ゐる。」と。親、瞿然として起ち、恭と訣れて曰はく、

キジがひなを連れていて
からです

「来たる所以の者は、君の政迹を察せんと欲するのみ。今虫境を犯さ

理由は。あなたの治政を視察しようと思ったからです

ず、化鳥獸に及び、豎子に仁心有り。三の異なり。」と。府に還り状を

子供にも思いやりの
心が備わっています

郡の
役所

以て安に白す。

報告した

『蒙求』による

（注）○魯恭・袁安・肥親Ⅱいずれも中国古代の王朝である後漢の家臣。

○字Ⅱ中国で、男子が成年後、実名のほかにつける別名。

○肅宗Ⅱ後漢の皇帝。

問1 専ら徳化を以て理むることを為し、刑罰に任ぜずとあるが、そ

の説明として最も適当なものを、次のアからエまでの中から選

さい。

ア 徳の高い人間ではなく、法律の専門家を重んじているということ

イ 人民の徳が高まらないため、刑罰に頼っているということ

ウ 刑罰に頼らず、徳による教で世を治めているということ

エ 世の安定よりも、自分の徳を高めることを優先しているということ

問2 波線部アからカまでの中から、主語が同じものを全て選

びなさい。

問3 其^②の実ならざるを疑ひ とあるが、何を疑っているのか。その内

容として最も適当なものを、次のアからエまでのの中から選びなさい。

ア 害虫による被害をまぬがれた県の中で、魯恭が治める県だけは穀物が実らなかったこと

イ 魯恭が治める県には害虫が侵入せず、穀物の被害が生じなかったこと

ウ 害虫が発生したことにより、魯恭が治める県でも多くの人々が飢餓に苦しんだこと

エ 多くの県が害虫の対策に取り組む中、魯恭が治める県が最も早く駆除に成功したこと

問4 次のアからエまでの中から、その内容がこの文章に書かれていることと一致するものを一つ選びなさい。

ア 袁安は視察に向かった先で魯恭に出会えたことを喜んだ。

イ 袁安は魯恭が治める県が自然の豊かな土地であることに驚いた。

ウ 肥親は子供からひなを守ろうとした親鳥の姿を見て感動した。

エ 肥親は魯恭の善政が県全体に及んでいることに感心した。